

大本山永平寺：大本山永平寺の概要

永平寺は、日本の禅宗の一派、曹洞宗の二大本山の1つである。1244年に道元禅師（1200–1253）によって設立されて以来、この寺院は日本の曹洞宗の重要な場であり、純正な禅の修行道場である。永平寺は今も数世紀前と同じように営まれており、何十人もの僧侶がここに住み修行に励んでいる。

道元禅師は、中国で禅僧如浄（Ch. Rujing; 1163–1228）に師事した後、1227年に日本に帰国した。帰国後数年間、京都近郊に住み、興聖寺を創設し、正しい坐禅のあり方を説く、「普勧坐禅儀」（ふかんざぜんぎ）と題する論文を書いた。1243年、越前の国の領主波多野義重の招きで道元禅師は越前の国（福井県）に移り住んだ。その地に道元禅師は永平寺を建立する。

道元禅師は師匠の遺言であった「都の群衆の中に住むのではなく、山の奥深くにとどまり、少数の人々を受け入れ、私たちの真の教えの継承に努めなさい」という師の言葉が都を離れる動機となった。道元禅師は越前の吉峰寺で坐禅を修行しながら最初の一年を過ごした。またそこで禅の教えを説き、坐禅の修行と仏教の教えに関する講義と解説集「正法眼蔵」（しょうぼうげんぞう）を完成させた。吉峰寺での1年後、道元禅師は同じ地域に永平寺を建立した。

永平寺は、道元禅師の理念に基づいて修行僧（雲水）たちが修行に励む場である。道元禅師の著書のひとつである「生死」と題された著作の中で、「あなたの体と心の両方を捨て去り、忘れなさい。仏陀の家に身を投じなさい。」と教えている。道元禅師は永平寺の空間は修行に最適であると考えた。寺院を仏陀の住まいとし、山を仏陀の身体とし、そして流れる小川を仏陀の声として思い描いたのである。後継者達は道元禅師の教えを忠実に守り、坐禅修行は今でも寺院の生活の中心となっている。

永平寺は世界中からの観光客が訪れているが、それだけではないのである。多くの人々が美しい景色の境内を見に、そして仏教セミナーに参加するために訪れている。永平寺は本質的に曹洞宗を代表する生きた修行道場であり、130人以上の修行僧が住んでいる。